

76 海峡の北への旅

春には予定していなかった海外旅行へ行行った。海外と言っても海峡を渡った北にある隣国である。夏休みに娘がこどもたちを連れて旅行するということで、まだ行ったことのない韓国へついて行くことにしたのである。三泊四日で釜山からソウル(漢城、京城)までバスで巡る格安旅行だ。古都を訪ねるツアーで、孫たちよりもわたし向きの旅らしい。予習をする時間がなかったが、ちょうど、中国の史書に記述された倭国のことを考えていたので、この旅はわたしを啓発してくれるだろう。

最初に降り立ったのは釜山。まず、朝鮮戦争の難民が開いた甘川洞文化村と、豊臣秀吉の侵攻軍に対して勇敢に戦った李舜臣の像が立つ龍頭山公園へ。その後訪れた場所でも、ツアー・ガイドはこの二つの戦争のことを語った。16世紀末の日本の侵攻は韓国人にとって語り継がれてきた歴史である。そして、20世紀になって日本が韓国を併合したことが日本への恨みを消せないものにした。両国人のあいだの関係を修復するには長い年月が要ると覚悟しなければならない。

ビビンバを食べて小さなカジノへ案内されたが、話が散漫になるといけないので、そのことは省略しよう。次に行ったのは海東龍宮寺。東の海から昇る日の出を拝む場所だという。

現在考えていることに関係するから興味深かった。日本の例からすると、この東西線上に山があってそこから日の出を拜んだと考えられるので、そういう山はないか質問してみたが、ガイドは知らないようだ。帰国してグーグル・マップで調べたら、案の定、ほとんど同じ緯度線上に萇山という山があった。バスから見えた目立つ峰がそうで、山頂付近には巨石がごろごろしているらしい。やはり、日本列島と同様の「太陽の道」信仰があったのだと思われる。朝鮮半島では、日本のような神社がつかられず、後世伝来した仏教寺院になったのだ。礼拝所の形は違っても、龍宮という名がもともと共通する観念があったことを教える。

そこへ行く道中、郊外でリゾートの趣のある海岸を通った。財閥が競って高層の集合住宅を林立させている。価格が五千万円以上の高級アパートメント（低層の住宅をマンションと呼び、名に反してそちらのランクが低い）ということだ。それだけのお金を出して買える人がたくさんいることにちょっと驚いた。所得の高い人々が多いということだろう。韓国人と日本人の所得の比較はどうなのだろうか。インターネットで調べてみると、単純比較で韓国の平均所得の方が多いようだ。政府にとって不都合なこのことは日本であまり報道されないから、多くの日本人がその実状を知らないのだ。

*

翌日は新羅の古都慶州へ。その郊外、標高 745m の吐含山

の中腹と山裾に、世界文化遺産に登録された仏教寺院がある。二つとも、統一新羅の時代、751年から築造を始め二十年以上かけて774年に完成したらしい。中腹にある「石窟庵」の方は半ばくずれ土に埋もれて忘れられていたが、1909年に発見されたあと再建されたのだそうだ。後方の釈迦如来像を安置したドームと方形の前室がごく短い廊下で結ばれ、壁には菩薩・十大弟子と四天王・仁王や八部衆などの像が彫られている。すべて花崗岩で造った見事な建造物である。遠くに東の海が見える場所にあり、ガイドの説明では、如来像の額にはめこまれたガラス玉が朝陽に照らされると光るといふ。そこへ上がる石段の右わきには泉の水を引いた蛇口があり、それを飲めば健康になるといふ。きっと「太陽の道」に関係していると思えた。

帰国後調べると、この前方後円形の“寺院”は冬至の日の出の方角に向いていることが分かった。そこが太陽の道の霊山なら方向を指定する標識がもう一つあるはずだ。そう考えてグーグル・マップで冬至の日の出の方向をたどっていくと、海に達してそれが本当に見つかった。海岸からおよそ200m沖合にある岩礁に文字が書き入れてある。名のある場所のようだ。ハンゲルを漢字に変換してみると、そこはなんと朝鮮半島を統一した新羅の文武王の墓だった。石窟庵から文武大王陵まで直線距離で13.86km、その直線は東西方向に対して+28度強傾いている。石窟庵から冬至の日の出を見る方角を調べて得られた値も28度強で、二つはまさしく一致した。

この事実は、Wikipedia を含めてインターネット上で指摘されていなかったから、忘れ去られていたのだろう。その岩は、夫婦岩のような立ち姿ではないが、681年に亡くなった王が葬られる以前から、太陽の道の夫婦岩の役割を果たしていたと推測できる。

わたしは感興にふけりながら思った。統一新羅の文武王は靈山から冬至の日の出を拝む方向にある“夫婦岩”に遺骨を納めることを願ったのだ。それはちょうど、金印と倭奴国の王が、太陽の道の靈山宝満山から昇る冬至の日の出を拝むことのできる（もう一つの靈山飯盛山の真北にある）志賀島の海岸に埋められたことに対応する（「蝶の雑記帳」第73話）。海峡を挟む南北に共通する「太陽の道」崇拝があったのである。

吐含山にあるもう一つの世界遺産は「仏国寺」という。こちらも、石段がくずれるほどの廃墟になっていたのを1970年代に再建したという。古代の姿が復元されて世界遺産にふさわしいものになったのだ。Wikipediaによれば、六つある国宝は、破壊を免れることのできた、それぞれ二つの石塔・金銅仏と復元された二か所の石橋(石段)である。花崗岩を加工する技術が発達していたと見える。ほぼ統一新羅の時代のものらしい。しかし、Wikipediaが、本殿である大勇殿は681年ころ創建されたと思われると書き、インターネット上の観光ナビは、この寺についての古記録を引用して、500年代前半の法興王のとき創建されたと書く。したがって、この寺は、

前代から時代を経ながら整備され、大きな規模で完成したのが700年代中期ということなのだろう。

これらの記事は、石窟庵について上で考えたように、吐含山は古くからの霊山で、新羅が発展して仏教が伝来すると仏教寺院として整備されたという見方を支持する。大勇殿が創建されたらしい年が681年ころだとすると、石窟庵の前身もそのとき造られた可能性が出てくる。681年というのは朝鮮統一を果たした文武王の亡くなった年で、石窟庵から見て冬至の日の出の方角にある岩礁に文武王の遺骨が埋葬されたころに、大勇殿が創建されたことになる。文武王の遺骨の埋葬に合わせて、廟に当たる仏国寺大勇殿を建てたように考えられる。だが、仏教以前の伝統からすると、御霊屋をつくる場所としては、冬至の“太陽の道”で結ばれる石窟庵のスポットの方がふさわしかっただろう。むしろ、文武王の埋葬に当たり、石窟庵の場所に文武王の霊を遥拝する社を建て、のちに大勇殿となる廟を建立したと考えた方が、古代人の対応をよく説明することができる。統一新羅の王朝が祖廟の祭祀を整備したのは文武王の死後間もない687年で、国力の増大した700年代中期に、仏教寺院として石窟庵と仏国寺の造営が始まったことともよく調和する。

帰国してからも、このツアーのおかげで、考察中の太陽の道と日本古代史に関する思索を広げることができて、わたしは喜ばしい時間をもったのである。

*

高麗青磁の窯元に寄り、昼食を済ますと、バスは韓半島の西にある全州へ向かう。『三国志』が魏の単位で四千里という韓半島を横断するのだ。釜山から北上した分を含めると、今日走る距離は 420km もの長駆。ただし、この道中にはもう一つ名所があった。やはり世界文化遺産の「伽耶山海印寺」である。この山は伽耶山と呼ばれているから、ここは伽耶すなわち加羅、『三国志』が記述した三韓のうち馬韓・辰韓と並ぶ弁韓の地域に属していたのだろう。バスは、『三国志』が韓の南岸にあるとした倭の領分あたりを出発して、辰韓から弁韓を通過して馬韓へ一日のうちに行くのである。

海印寺は、統一新羅の時代の開山で、高麗の時代に国刹になったという。この寺の宝は八万大藏経、仏教の一切経である。それも、大藏経を印刷するための版木である。Wikipediaによれば、北宋の時代の中国で製作された木版を受け継ぐもので、モンゴルの侵攻がさし迫った高麗時代、十五年かけて 1200 年代半ばに完成したものらしい。日本で大正時代に出版した『大藏経』の底本になったという。ここには、東アジアの中・韓・日三国の深い歴史的・文化的なつながりが刻まれている。木版印刷は北宋時代に始まり、すぐに高麗がそれを取り入れたのだった。

一切経を収蔵する海印寺大藏経板殿は 1400 年代末に建て

られたそうだ。千五百余りの経典が八万一千余枚の版木に刻まれているという。その版木を含めれば、なるほど世界遺産に値するだろう。棟の長い二つの建物の窓には、風雨を防ぐ戸がなくて格子だけがある。風を通して湿りを蒸発させるのに、工夫が施されているという。紙の印刷物ならできないこと。格子の外から、版木が書物のように何段もの棚に並べてあるのが見える。人間の宗教に対する熱心さに感嘆しながら見入った。版木一枚の大きさが、縦 24cm 横 70cm 厚さ 4cm、合計で 280t になると知ったのは帰国してからである。

*

翌朝は、まず全州市内の韓屋村というところへ行った。古い家屋の風情を再現した店が立ち並び、韓国の伝統文化で観光客を呼び込むところだ。ガイドの話では、全州は朝鮮王朝を建てた李氏の祖先の本貫の地で、李氏朝鮮の宗廟が建てられたところという。ガイドは、全州李氏は最有力の兩班(上級身分)だった、と何度か言った。李氏朝鮮は 20 世紀初頭まで続いた王朝だから、近代まで社会的な影響が残ったのだろう。韓屋村の入り口に教会があったが、そこは 1800 年ころのキリスト教徒殉教の地で、のちにそこに教会が建てられたのだという。韓国でも、日本と同じようにキリスト教徒の迫害が起きたのだ。仏教も抑圧した朝鮮王朝では、李氏の宗廟は儒教の形式に則り、新羅の石窟庵や仏国寺とは異なる。

全州周辺は広い平地で海岸の方向に高い山が見えない。これは韓半島の東西をくらべて多かれ少なかれ言えることで、西海岸の方が農業生産に向いた土地が広い。実地に旅をして、『三国志』が馬韓を辰韓よりも国の数が多くて人口も多いと書いたわけが理解できた。

やがて、バスは北上を始めた。馬韓を統一した百済の古都へ向かうのである。この道順だと、百済の歴史をさかのぼることになる。

詳しい歴史を知らないので、Wikipedia で調べてみた。百済は 300 年代中期に確立し、漢江流域のソウル付近にあった都は漢城と呼ばれた。その名は、300 年代初期まで中国の魏・晋が置いた帯方郡の城市にちなむのだろうか。475 年その都を高句麗に落とされて王も死に、約 120km 南を流れる錦江南岸の熊津（ゆうしん、今の公州）に都を移したが、その後、南部に領土を拡大すると、538 年、都を約 40km 西南にある錦江下流の泗泚（しび、今の扶余）へ移したのだという。

全州から北上すると、最初に扶余に行くことになる。グーグル・マップを見ると、公州も扶余も錦江の川岸にあるのだが、広く周囲を山で囲まれていて防衛が重んじられたと見える。扶余の王宮は、かなりの広さの盆地の東北部、錦江が湾曲して西側半分を取り囲んでいる場所に築かれた。しかし結局、この場所は攻め落とされて百済は滅ぶ。高句麗・百済・新羅の三国がせめぎあっているところへ、高句麗を攻めあぐ

ねていた唐が朝鮮半島侵攻の戦略を切り替えたことで事態が転換する。高句麗・百済に対して守勢に立たされた新羅は、高句麗の敵対者である唐に援軍を求める。660年、黄海を渡って来た唐軍によって百済の都は灰燼に帰した…。

というわけで、扶余に行っても昔の姿はない。ただ、王朝の建造した定林寺の址と王宮の背後にあった山が、王国の最後の物語を偲ぶよすがである。唯一残った遺物は、定林寺境内にあった五層の石塔のみ。ツアー・ガイドが、石塔の下部に薄く見える文字を指さして唐の将軍が刻ませたのだと言う。戦勝の功を誇る文が歴史の証文となっている。わたしが王宮はどちらにあったのか訊くと、ガイドが指した方角は北だった。王宮と寺は、南北を中軸として北と南に配置されたのだ。この質問をしたのは、太宰府では政庁の東に観世音寺が配置されているのと比較したかったからである。わたしの予想に反して、時代の近い二つの都府で、王宮と国家鎮護の寺の配置は異なっていた。太陽の道の伝統を継承する大宰府では、東西方向を尊重して仏教寺院も焦点の東に置かれた。奈良でも、後世の平城宮のすぐ東には高皇産霊神(たかみむすびのかみ)を祀る社があり、東の山際に東大寺大仏殿と二月堂の泉がある。隋の都大興城では、国寺の大興善寺と道教寺院が朱雀大路に面して、つまり中心軸に置かれたようだから、百済は中国の流儀に倣ったのだ。

ツアー一行は、次に王宮のあったあたりに行った。そこに

はめぼしいものはなく、王宮の背後の最後の防衛戦の場所となった山城へ。ゆるやかな坂を少し上ると二つ三つ昔を偲ぶ建物が建てられていて、それを見学した。一つの堂には三人の忠臣の像が立てられている。一国が亡ぶとき国家に殉じた人物が、後世、忠義の鏡として顕彰されるようになったのだろう。続いて、遊覧船に乗り白馬江すなわち今の錦江に浮かんだ。船は山城の背後まで往復する。目指す崖には落花岩という名がついていた。落城に際し多くの宮女が身を投げたところという。亡国に重ねて女性たちの哀れな最期がロマンティックな言葉にしてある。手向けに一句捧げる、落花散る川風涼し扶余の城。別に一首、一国が石塔残し燃え尽きた百済の故地にまだ苛烈な日。

昼食をとって乗車したバスは 40km 余り走って、公州にある公山城に着いた。扶余の定林寺と山城やこの公山城など百済の遺跡は、2015 年に世界文化遺産に登録されたそうだ。われわれのツアーは貴重な世界遺産を巡っている。

熊津と呼ばれたここが、扶余（泗泚）以前の約 60 年間百済の都だった。北の漢江流域にあった都を高句麗に攻め落とされて王も死んだあと、ここに逃れて国を再興したのである。強国になった高句麗に対する防衛の意識が強かったのだろう、パンフレットを見ると、それほど広くない小山を城としてその中に王宮を構えたのだ。元の都の漢城にくらべて見劣りしたことだろう。のちに国力を回復し、錦江に抱かれてゆ

ったりとある扶余の都よりも窮屈な王城だ。今年は猛烈な暑さで雨も降らなくて果菜園の世話に苦勞したが、海峡の北でも同じような天気だったと見える。植えたつつじなどに枯れてしまったのもある。八月の中旬なのに今日は陽射しが特に強くて、一行の中には上まで登らない人もいたが、眺めのよいところに出ると、足元を流れる錦江の向こうに広がる公州市の街並みが展望できた。しかし、公州市はそれほど広い平地にあるのではなく、周囲に山が広がっている。ここでなんとか国を保ったという感を抱かされた。そして、また一首を得た。炎天下物見へ登り見晴るかす川が頼りの百済の古城。

炎天下、バスはまだ 200km 近く残る行程に行く。目指すのは漢城。

*

翌朝、漢城府の王宮へ詣でた。と言っても、この漢城府は李氏朝鮮の首都である。もはや百済の漢城は地層に埋もれて跡形もない。王宮の名は昌徳宮。日本に生まれて教育を受けたわたしは、今日までソウルを漢字で京城と書くと思っていた。それは誤りなのだ。調べるうちに、ここの歴史に日本が深くかかわっていることを改めて教えられた。

高麗から王位を奪った李王朝は、高麗の都から南の漢江流域へ遷都した。最初は漢陽府と呼んでいたのを漢城府に改めたのだそうだ。それで、百済の最初の都と同じ名になったの

だ。先ほど考えたように、漢城という漢字は、紀元前に漢が楽浪郡など四郡を置いてのち魏・晋の帯方郡まで、この地方に中国の城市があったことと関係しているのだらうと思う。李王朝の宮殿は別のところにあったが、豊臣秀吉の朝鮮侵攻戦の中で消失し、その後、離宮であった昌徳宮が王宮になったのだという。近代になると、日本は、清、続いてロシアと朝鮮半島の支配をめぐる対立し、1910年、とうとう併合してしまっただけだ。そのとき、日本が行政区の名を漢城府から京城府に変えたのだという。今はハングルで書くソウルというのは、都を意味する朝鮮語だそう。この都の名を漢字表記すれば、歴史を体現しているのである。

昌徳宮はもともと離宮だったので、大きな王宮ではない。王宮の中心は、前庭の広い仁政殿や王が日頃政務をとる宣政殿と右の熙政殿などだが、区画の規模はそれほど大きくない。王と王妃の住まいである大造殿も、おおぜいの人々が仕えるのに十分な広さではなかったと見える。そこが、1600年代から270年間ぐらい、朝鮮半島ほども大きな国の宮殿だったのだ。つい、経費は少なくて済んだらうと思ってしまう。

熙政殿だったと思うが、ツアー・ガイドが天井から下がっているシャンデリアを指さして、1907年に備えつけられたのだと説明した。わたしは、日本が併合する三年前にそういう改修が行なわれたことをいぶかしく思った。帰国しての学習で分かったことは、欧米諸国がやって来て騒がしくなった

1865年ころ昔の正宮を再建して移り住んだが、日清・日露戦争と情勢が暗転する中、国号を大韓帝国に変えて二代目の皇帝が1907年に即位すると、また昌徳宮を宮殿にもどしたのだそうだ。すると、シャンデリアはそのときつけられたのだ。こうしてわたしは、初めて隣国への旅をして、その国の歴史を少しは知ることができた。旅はするものである。

*

昌徳宮の外の通りの一つは、かつて書画や文房具などを売る店が並んでいたらしい。今は、若者向きの店が多くなって、外国の旅行客も訪れるところになっている。ツアーの最後はここで自由時間。ぶらついていたわたしは、昔の品ぞろいを残した店で小さな横長の絵を見つけた。伝統衣装を着ている十人ぐらいが踊りながら進んでいる絵柄で、日本の昔のようすとはまたちがった雰囲気でおもしろい。家族はそれぞれみやげを買ったがわたしはまだだ。値段を聞くと日本円で二千円余り。手ごろだと思って買った。

丸めて持ち帰ったその絵を入れる額を探さなければならぬ。帰国して、前から気になっていた額販売店に行ってみたら、そこは自分のところで製作もしているという。八十を超えているだろう人品卑しからぬ主人が材料をいろいろ示して相談に乗ってくれて、注文が決まる。製作費は二千円いくらと末尾までゼロでない数字の値段を、にこやかな顔で提

示された。今もこういう好人物がいるのだ。こんな田舎の額製作所にプロの絵描きも注文を寄せるそうだ。

出来上がって受け取りに行くと、この絵は手書きのようだと言われた。たしかに、踊り手が手にしている長いリボン様のものは手書きのようだ。しかしその値段からして、人物の黒い輪郭はプリントで、その上に色をほどこしているのだろう。でも紙は、和紙のように手すきのよい紙で、少し色味のある大きめの繊維も混じっている。みやげ物にしてはなかなか趣のある品である。踊り手たちは総勢十人、太鼓や銅鑼を叩くものもいて、それぞれ異なる姿勢で手や足を振っている。先頭の方の一人が持っている竿では、「農者天下之大本」と書いた旗がたなびいている。文字は手書きのようだ。一行は、今では時代遅れになった標語を押し立てて進んでいるのだ。その言葉を貴重だと考える拙なる老園丁は、このことも気に入っている。秋になった今、似合いの小さな扁額に入ったその絵を壁の一面にかけて、ときどき鑑賞しながら心を温めている。

2018年11月